

の記述がある。

「赤い鳥」初号には（推奨作品）はあるが（投書として発表された童謡）はない。第2号にはじめて海野厚一の（鴉・鴉）以下八編が掲載されるが、ここに名をつらねた人々の名前はその後一度もでてこない。架空の名前であったかも知れぬ。その他の編の数もい、加減なものか？ これらの名前の中でその後も雑誌に出現するのは、第二号と第六号で推奨になった海野厚一だけである。白秋の文中にある（わたしと極めて親近な四、五の共同創作）というその四、五が誰と誰であるかわからぬが、あるいは海野などもその一人だったかもしれない。



厚童謡の「赤い鳥」に載ったものは、1-2に2編、1-4に1編、1-6に1編、2-5に1編、合せて5編、うち4編が発刊後隔月に載ったにもかかわらず、残る1編は翌年の5月号で、かつこれは「推奨童謡」になっていない。

い。大正8年1月から4月にかけて他に多忙な事があったとは年譜記事からも考えられないし、5カ月間投書をしなかったのではなく投書がすべて没になり、5カ月ぶりに採用された1編も単に入選にすぎなかったことで、厚の投書熱がさめたとも考えられる。ただし「赤い鳥」に対してである。（その代り當時出ていた「海国少年」5月号に詩を寄稿した形跡があり、同誌への傾斜は翌大正9年にかけて深まっていく。）

厚が北原白秋と「共同創作をするほどの親近な関係」にあつ

たことを示す資料は見当たらない。

▽大正8年（1919）

1月5日付東京青木幸太郎宛賀状。（静岡龍華寺の写真ハガキ）

2月・「曲水」（3-9）、近詠1句。

3月・「曲水」（3-10）。募集句「麗」選者吟2句。水巴選

「鶴林俳句集」2集に3句。小品「緋の上靴」及び短文「桜襲」

5章を載せる。

4月・吟社4月例会、席題「花鳥忌、燕」に1句。

「曲水」（3-11）。短文「花御堂」。人物記「曲水吟社の人

人」(1)

5月・吟社5月例会、席題「端午」に1句。

「赤い鳥」（2-5）、創作童謡欄に「子雀」が入選。以後同

誌に厚一の作品の掲載はない。

「海国少年」5月号に詩を寄稿したと考えられる記事が、同

誌（5-4）投書欄に見えるが、たしかめるすべがない。

「曲水」（3-12）、短文「端午」2章及び吟社4月例会記事。

6月・吟社6月例会。席題「更衣、鮎」に2句。

「曲水」（4-1）、句帖に4句、人物記「曲水吟社の人々」

(2)。

7月・弟欣也の旧制松山高校入試受験に付添い、道後温泉に遊ぶ。ふな屋方に逗留。

7日付東京青木幸太郎宛、写真ハガキ。

8日付静岡加藤余石宛、写真ハガキ。

7月13日執筆の日付がある「浴泉雑記」はこの道後逗留を材